

# 通信小海

## お金の奇妙さ

牧師 水草修治



ベルリンの壁が壊れて計画経済によるユーロピア建設という共産主義の歴史の実験が失敗に終わったのが、一九八九年十一月。あれから二十年、今度は「市場に任せればなんでも魔法のようにうまくいく」という市場原理に立つ資本主義の実験結果は、格差社会の拡大・世界金融バブルの崩壊・環境破壊という失敗であった。

歴史は、共産主義にも資本主義にも欠陥があることを証明した。両者に共通する欠陥の一つは、「利子がつくお金」というシステムであるとミヒャエル・エンデは早くから指摘

今月の御言葉

「あなたがたは、神にも仕え、また富にも仕えるということはできません。」  
マタイ六章二十四節

していた。農作物であれ工業製品であれ、時がたてば古くなって価値が減少していく。ところが、お金は古くならず、利子がついて価値が増えていくという奇妙な性質を持たされている。

人は価値が減っていく物よりも、価値が減るところが増えていくお金を欲しがり、これを蓄える。それで貧富の格差が生じ、さらに利子によって格差はひろがる。南北の経済格差の根本因は利子が付くお金という仕組みにある。途上国が先進国に払っている利子の総額は、援助総額の約二倍。格差は拡大する一方である。

経済は毎年成長するよう強制されている。成長しないと不景気に陥る。地球に限界があることを思えば、成長しないと倒れる経済の仕組みは無理である。経済規模が成長しなければならぬ理由の根っこには、利子をつけて返さねばならないお金の問題がある。

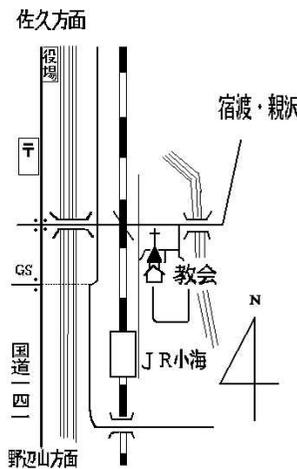
日本同盟基督教団 小海キリスト教会 牧師 水草修治

会堂・牧師館 南佐久郡小海町大字小海四三三五 二七

〒三八四一一 二二 二六七九二四七七六

〒振替 〇〇五三〇 〇 六一六八三

## 見晴台の教会へどうぞ



## 集会あんない

日曜日 朝礼拝 午前十時から十一時半  
夕礼拝 午後七時半から八時半

\*海尻・川上・南相木・甲斐大泉で毎月一度 集会をしています。

個人的な聖書勉強や個人的なことも乗ります。

昔の人は物々交換では不便なので、お金という便利な道具を発明した。金は物や労働の代価として支払われた。しかし、世界がインターネットで結ばれ清算が瞬時に行われうるようになると、投資家はカネでカネを売買することに熱狂し、カネ自体が目的になった。労働も品物も関係ないカネ儲けゲームである。実体なき経済は過熱しバブルが膨らみ、そしてはじけた。

また、景気が悪くなると、金持ちは労働者の賃金をカットしたり、解雇して、お金を寝かせておく。お金は腐らず保存が利くからである。するとお金が市場に不足してさらに不景気になり、金持ちはさらにお金を死蔵して悪循環となる。

お金というものは、もとは道具だったが、今や偽りの神なのである。本来、永遠は神のみであって、被造物はみな時間と共に朽ちて価値が減っていくべきものなのに、人間はお金に永遠性を持たせてしまった。また、本来すべてのものの価値を定めるのは神のみであるのに、人はお金ですべてのものを価値付けることができる尺度のように思い込んで、人のいのちや愛まで

カネに換算して人生を無意味にした。

まことの神を持たないと、私たちはお金に心を支配されるようになる。いつもお金のことで気分が高揚したり落ち込んだりしているとしたら、私たちはその奴隷になってしまっている。

主イエスは道具にすぎない金銭を目的と取り違えること、神格化することの危険性について警告された。

「だれも、ふたりの主人に仕えることはできません。一方を憎んで他方を愛したり、一方を重んじて他方を軽んじたりするからです。あなたがたは、神にも仕え、また富にも仕えるということはできません。」マタイ六二四

「利子がつくお金」には被造物の分を越えた神のような性質を与えられている。世界はこの「利子が付くお金」によって引き回され、滅びようとしている。解決はどこにあるのだろうか。おそらくお金から「神性」をはぎとることが必要なのだろう。



# お米を感謝します。

寒空の下で仕事を失い、空腹をかかえている人たちのためにと、幾人かの方からお米が寄せられました。ありがとございます。世界同時不況ですが、助け合っても生きてまいりましょう。寄付をよろしくお願いします。

送付先 小海キリスト教会にお持ちくださるか、

南牧村社協へ。

〒384-1302 南牧村大字海ノ口966 1

5 南牧村社会福祉協議会 気付 山谷農場

\* 着払いによる送付はご遠慮ください。荷札に「木曜午後送付希望」とお書きください。

山谷農場事務局 藤田 寛(小海町芦谷ヒルサイ  
ドコーポ 一 二号室 毎週金曜 土曜はあります。

電話 090 1436 6334

〒777-0427 060-2088

メール [nyoro@beige.ocn.ne.jp](mailto:nyoro@beige.ocn.ne.jp)

カンパニ振替 二四 四五三七九六

「アブラハムの生涯」

# ソドム



主はアブラハムに言われた。「ソドムとゴモラの叫びは非常に大きく、また彼らの罪はきわめて重い。わたしは下って行って、わたしに届いた叫びどおりに、彼らが実際に行なっているかどうかを見よう。」

ソドムとゴモラは紀元前二千年頃、カナンの地においてもっとも栄えていた都市国家であった。この地は、メソポタミアとエジプトを結ぶ通商路だったので、行き来する隊商たちがこれらの都市に富と文物をもたらしたのである。

しかし、経済的・文化的繁栄には腐敗がともなう。当時のカナンの地では、近親相姦・夫婦交換・同性愛さらに獣姦が習俗となっていた（レビ記十八章）。習俗となっていたことは、こうした行いが異常であるとか、罪であるとかいう認識そのものがなかったということである。英語にはソドミーと

いう単語があるが、これはソドム風の生き方、男色を意味している。

車であれパソコンであれ薬であれ、その設計者は正しい使用法を定めている。正しく用いれば有益だが、自分勝手な用い方をすれば被害をもたらすことになる。造り主は、被造物である私たち人間の生きるべき道を定めておられる。造り主の意図にしたがって私たちが生きていけば、私たちは造り主の祝福を味わうことができるが、造り主の意図に反して欲望のままに自分勝手な生き方を選択するならば、罪であり悲惨を味わわねばならない。

性は神の意図に沿って正しく用いるならば、人間に喜びと繁栄をもたらす。神は結婚した男女に「生めよ。ふえよ。」と祝福のとばをかけた。しかし、性を神の定めた範囲を超えて勝手な用い方をすれば、自分と自分の周囲の人々に悲惨をもたらし、神の怒りを買うことになるのである。

ソドムの地の人々は、造り主である神に背を向けて生活するうちに、いったい何が正常な性徳であるのかということそのものがわからなくなっていた。「愛」という美名の

もとに、欲望のおもむくまま誰とでも寝るというありさまだったのである。もしこうした習俗が人類全体に広がるならば人類はみな腐り果ててしまふ。そこで、神はこのソドムとゴモラの町に火と硫黄を降らせて滅ぼされた。今、その廃墟は死海の南端の湖底に沈んでいる。

私たちは、この出来事を遠い四千年前の出来事としてすませられるだろうか。同じような出来事はイタリヤのポンペイでも起こった。ソドム滅亡の記事を読んで、現代の世界は、この日本は、私たちは、いったい大丈夫なのだろうかという思いにとらわれてしまふのは、筆者だけではあるまい。

「さあ立って、逃げなさい。さもないと、あなたはこの町の咎のために滅ぼし尽くされてしまおう。」創世記十九章十五章

「ロトがソドムから出て行くと、その日に、火と硫黄が天から降って、すべての人を滅ぼしてしまいました。キリストが現れる日にも、全くそのとおりです。」

# 誘惑



紀元前千年ころ、イスラエルの第二代目の王にダビデという人物がいた。ダビデは一介の羊飼いかから身を起こしてついに王座にまで上り詰めたイスラエル版日吉丸とでもいふべき英雄である。しかし、その頂上に悪魔の罠が待っていた。

ダビデは若い日から勇敢な戦士で、戦となれば常に自ら先頭に立って矢玉のなかを突き進んで勝利を得てきたのだが、王になったとき油断が生じた。部下たちが敵しい戦いをしていた真つ最中のある日、彼は都の王宮にとどまっていた。昼寝をして目覚めたのは夕暮れ時。夕涼みに屋上をぶらぶら歩きながら町を見渡すと、民家の庭で水浴びをしている女の白い姿が目にとまった。遠目にもたいそうな美女である。

目に入ったのは仕方ないことだが、女を見つめ続けた心の姦淫が罪だった。ダビデは

劣情に捕われてしまう。彼は部下に命じて女の身元を調べさせると、彼女は忠臣ウリヤの妻バテシエバであった。この知らせを聞いて、すぐに断念すべきだった。ところがダビデは「なに、お茶を一緒にするくらいいよいだろ。」とつぶやいて、女を宮殿に連れて来させてしまう。結局、ダビデは部下の妻バテシエバと関係をもってしまうた。

戦は長引いていた。しばらくするとバテシエバから使いの者が手紙をたずさえてきた。おなかに王様の子どもができてしまいました。」というのである。ダビデ王は慌てたが、すぐ一計を案じて、ウリヤを戦場から召還して慰労した。

「ご苦労であった。きょうは家に帰って、夫婦水入らずで楽しむがよい。」  
ところがこのウリヤはまじめがよろいを着たような堅物だった。

「王様。とんでもございません。わが戦友たちが命を的にして戦っているのに、どうして私ひとり、家に帰って妻としとねをともにすることができません。」

ウリヤは自宅には帰らず、翌朝には戦場

に帰っていくという。武士の鑑といふべき男だった。が、王にはウリヤのことはも行動も自分に対する非難のように感じられ、ウリヤをなき者にするほかないと考えた。

王はウリヤに戦場の將軍あての手紙を持たせる。その手紙には次のようにあった。「ウリヤを激戦の正面に出し、兵を引いてウリヤを死なせてしまえ。」

こうして忠臣ウリヤは死んだ。

しかし、ダビデがしたことは神の激しい怒りを買うことになった。ダビデの前半生は輝いているが、後半生は恐怖と悲しみと恥辱に満ちたものとされてしまうのである。

「人はそれぞれ自分の欲に引かれ、おびき寄せられて、誘惑されるのです。欲がはらむと罪を生み、罪が熟すると死を生みます。愛する兄弟たち。だまされないようにしなさい。」

ヤコブ一章十四・十五

